美人歯科医　*The Ball-Busting Dentist by Kandor*

マットが町に新しくできた歯科医院に通いはじめたのは、女医のラルーサがお目当てだった。

これほどの美人は見たこともない。マットは一目惚れした。浅黒く、頬骨の高い、イタリア系。滑らかな肌、大きなブラウンの眼、ショートカットの黒い髪。

彼女がドリルを彼の虫歯に当てているさなか、マットは口のなかに歯のかけらと血が流れているのを感じながら、じっと彼女の顔を見つめていた。

「こんにちわ、マシュー」

緑色の白衣を身につけ、白いマスク、プラスチックのシールドで顔を覆ったラルーサ女医は、診察室に入りながら明るい調子で声をかけた。彼女の後ろに、魅力的な助手のコニーが従っている。

「どうも、ラルーサさん。きょうもきれいですね」

マットは、下心を隠そうともせずに言った。

「いやあ、白衣の天使といいますけど、そんな恰好をしててもスタイルがいいってことはよくわかりますよ。コニーさん、あなたもだ。一度、その中身を拝みたいものです。はっはっは」

女医と助手は顔を見合せ、マスクの下の口許をほころばせた。マットは得意気だった。この調

子じゃ、どちらか一方はものになりそうだ。
「マシュー。今日は、ちょっと違う麻酔法を試したいの」
ラルーサは言いながら、そっと背後のドアを見やった。
「へえ、どんな？」
『苦痛移転法』と呼ばれている方法よ」
彼女は言った。
「たぶん、あなたも気に入ると思うわ。ノーとは言わせないわよ」
不意に、二人はマットの両手と両足を治療台に固定した。マットは困惑した。
「え？　え？」
マットは縛られた両手と両足を見、それから背後の女性たちを見た。
「簡単よ、ほんとうに」
ラルーサ女医は言い、マットのズボンを膝までひきずり下ろした。半ば勃起したペニスと陰嚢が露になった。
「歯の痛みを、別の場所に移動させるってわけ」
「え、どこに？」
彼女は微笑み、マットの口を開けさせ、虫歯にウィ～ンと唸りをあげて回転するドリルをあてた。麻酔なしだ。あまりの痛みにマットは悲鳴をあげた。ラルーサ女医が大声で言った。

「玉！」
次の瞬間、コニーが拳を固めてマットの睾丸を殴りつけた。マットの悲鳴はドリルの音にかき消された。ラルーサ女医は、深くドリルを虫歯に押し込んだのだ。恐怖に見開かれたマットの眼に、ラルーサ女医の微笑みが映し出された。
ラルーサ女医はマットの虫歯を掘削しながら、コニーに向かって数秒置きに頷いた。その度に、コニーはマットの無防備な睾丸を殴りつけた。
やがて、ラルーサ女医はドリルを引き抜き、回転を止めた。
マットは涙でぐしゃぐしゃに顔を濡らしながら、言った。
「や……や……やめて……く……ださ……い……」
あまりの痛みに、口も舌もうまく動かなかった。
「だいたい終わったわ。あとは詰め物をするだけよ、マシュー。だから、じっとしていて」
ラルーサ女医は静かな口調で平然と言った。
「新しい麻酔法はいかが？　睾丸の痛みのおかげで、歯の痛みは感じずにすんだでしょう？」
ラルーサ女医がコニーに向かって頷いた。今度はコニーは睾丸を殴らなかった。そのかわり、思い切り握りしめ、ひねりあげた。マットはあまりの激痛に痙攣し、暴れた。彼の腕や脚を縛ったロープが肌に食い込み、血が滲んだ。
ブルネットの美しいコニーは、マットの眼を見て微笑みながら言った。

「この患者にはあまり効果ないみたいですねえ。ほかの患者だったらとっくに失神してるはずですよ」
「わかったわ。じゃ、もっと強くやって」
言うなりラルーサ女医は、マットの口を開けさせ、虫歯に詰め物を詰めはじめた。
コニーは、サンダルを脱ぎ、踵をマットの睾丸に打ち込んだ。マットは身を反らせ、大きく痙攣した。コニーは容赦なく、何度も踵で彼の睾丸を蹴った。その度にマットの喉から、悲鳴やうめき声が漏れた。だが、ラルーサ女医は平然と治療を続けた。
「もういいわ、コニー」
詰め物を終えたラルーサ女医が言った。
「そのやり方でも不十分みたい。あなたは詰め物を整えて。私が麻酔をかけるから」
コニーは、呻くマットの口のなかを覗き込み、詰め物をきれいに整え始めた。ラルーサ女医は、萎えしぼんだマットのペニスを持ち上げ、腫れあげった陰嚢を「診察」した。指で陰嚢をなぞり、睾丸を強く押した。
マットが悲鳴をあげた。ラルーサ女医は、マットの口のなかに手を突っ込んでいるコニーを見やって頷いた。コニーは頷きかえし、マットの口から手を引き抜いた。
ラルーサ女医は右の睾丸を指ではさみ、ひねり潰した。
マットが恐ろしい悲鳴をあげた。だが、ラルーサ女医は、冷静に、何事もなかったかのように

左側の睾丸を左手の掌に乗せ、拍手をするように右手を撃ち下ろした。
マットは激しく顔を左右に振り、それから急に動かなくなった。
ラルーサ女医とコニーは、静かに彼のズボンをはかせた。
マットは、治療台にだらしなくのびていた。白目を剥き、肌は灰色にくすんでいた。かすかな痙攣は、かつて彼の睾丸を収めていた陰嚢から、間断なく激痛が発せられ、彼の全身を苛んでいることを示していた。
「悪くないわね」
ラルーサ女医は診察室を出ながら、コニーに言った。
「じゅうぶんにサンプルは採れたわ。『歯科医会雑誌』にレポートを寄稿しなくちゃ」
「それとも、『週刊玉潰し』に!」
コニーが応じた。
二人の女性は笑いながら診察室を出てドアをしめた。もはや男ではなくなったマットを放置したまま。